



昨年の遺稿展にて

わだつみのこえ記念館
 Museum Watatsuminokoe Newsletter
記念館だより
 No. 2
 2008. 8. 1

江戸東京博物館で特別展示

戦没学生遺稿展

8月13日(水)～16日(土)

今夏「学徒出陣」六五周年を記念する8・15集会の前後四日間に、同集会の会場となる江戸東京博物館ホールのロビーにおいて、「戦没学生遺稿展」が開催される。わだつみのこえ記念館設立を記念して開催された昨年の特別展示に引き続き、同じ会場で行なわれるが、今年は一泊四日間とし、八月十三日(水)から十六日(土)まで。

わだつみのこえ記念館所蔵の戦没学生の遺稿と遺品の一部を中心に、遺影とともに出展することは昨年と同じだが、昨年の反省から、アジア・太平洋戦争の歴史を解説する展示パネルや、戦跡地図や年表・新聞写真

などのパネルを使って、戦没学生の遺稿を読むときの参考となる情報となるべく多く提供しようという計画された。記念館での展示方法に準じて、戦局展開の時期区分をしつつ、記念館ではスペースの制約から展示ケースに収めきれない戦没学生の遺稿等もなるべく広げて展示される。

『さけ わだつみのこえ』に収録されていない遺稿で、記念館開館後に新たに寄託された原資料についても、スペースのある限り、説明資料・遺影とともに展示される。また、とくに京都大学、学習院大学、明治大学など(予定)の各大学所蔵の戦没学生の遺稿や原資料が、当記念館と交流のある所蔵組織・スタッフの好誼により展示される。

また、朝鮮人の「志願出陣」学徒などの二次資料をはじめ、戦没学生に関する遺稿集や追悼集などの出版物もなるべく多く展示される。総じて、昨年の特別展示よりも説明を増やし、また、展示ケースの照明にも意を用いて、読みやすく分かりやすい展示となるよう計画されている。

なお、十五日(金)の集会(博物館ホール)では、徴兵された中国戦線と沖繩戦の戦場体験をされた近藤一氏



撮影/津布久 智

の講演が行なわれるが、講演に引き続いて、戦後復員した元学徒兵の大塚雅彦・久米茂・鈴木均の三氏(故人)の映像ドキュメント証言がある。

また、十五日(金)を除く三日間には、遺稿展と同時並行して、ホール内では当記念館所蔵の映像資料が上映される。

十三日(水)「日本ニュース『学徒出陣』、新作映画『さけ、わだつみの声』、『ほくもいづくに征くのだけれど』竹内浩三・戦時下の詩と生』。

十四日(木)「日本ニュース『学徒出陣』、旧作映画『さけ、わだつみの声』、『映像記録史太平洋戦争』(前後編)、『東京大空襲一子どもたちの証言』(江戸東京博物館より借用)。

十六日(土)「報道ニュース『わだつみのこえ記念館開館』、『政府派遣遺骨収集の記録』、『遅すぎた聖断―検証・沖繩戦への道』、『ドキュメント沖繩戦』、長編ドキュメンタリー映画『ひめゆり』(プロダクション・エイシアより借用)。

昨年の遺稿展には三日間で約三千名の観覧者があったが、今年の特別展示にはそれ以上の観覧者数が期待されている。広報にご協力を乞う。

記念館運営へのお力添えを 維持会員・基金賛助会員

当記念館を運営する特定非営利法人わだつみ記念館基金(二〇〇五年八月三日設立)は、去る六月末までに第三期事業年度(二〇〇七年度)事業報告書等を所管庁の東京都に提出し受理された。当事業年度における本法人定款所定の記念館管理運営・資料収集・情報交換交流・講演会等開催・普及啓発の各事業に充てられた経費および本法人経常管理費の総額は約四五七万円、経常収入約一千一十二万円により当期正味財産増減額は約六六四万円であった。

そして、前年度中に、わだつみ会が記念館設立のために義捐拠金と自己資金を蓄積してきた特別会計残高の当法人会計への繰入れを終えた。

本紙前号で「記念館維持会員」また「基金賛助会員」としてのご支援をお願いしたが、前年度には維持会員に二〇四名、賛助会員に八三名の方々が加わってくださった。

維持会員の方々には今年度も継続して会費二千円の拠出をお願いし、また、この記念館の事業活動に関心をもつて維持会員の輪に加わってくださる方をご紹介いただきたく、よろしくお願いいたします。

当記念館の事業活動は、戦没学生の遺稿・遺品の常設展示を中心としながらも、アジア・太平洋戦争の彼のあらゆる戦争犠牲者に関する資料(文書・映像・音声資料その他)とその歴史研究資料を広く収集して公開するために、より一層の取組みを必要としている。「わだつみの悲劇をくりかえさない」誓いを後世に伝えていく施設として、次の世代に引き継いでもらうための準備を整える課題もある。当記念館を開設して二年目を迎える、館の運営を長期的な軌道に乗せるための組織的方策と財政的基盤の確立をいま法人基金理事会は検討中である。記念館設立のためには賜ったご支援に感謝しつつ、基金賛助会員(一口一万円、何口・何回でも)の拡大についても、お力添えをお願いいたします。

Are these voices grief-filled or angry?
 But can they be silenced or ignored?
 Listen to the eternal voices from the deep?

恨不恨愠不愠
 疑是方骨莫言
 低頭傾聽向滄海

슬퍼하겠나 노여워하겠나
 그저 침묵만 하겠나
 들어라 저 끝없는 바다 성령의 소리를

Ecoutez-les!
 Pleurent-elles,
 Sont-elles furieuses
 Ou gardent-elles le silence,
 Ces voix qui nous viennent
 de la mer infinie ?

Çu bedaüras,
 çu indigans,
 aü gi ja muta restas ?
 Jen aüskultu,
 voçojn de oceano,
 la senfinajn !

戦没学生の遺稿集『さけ わだつみのこえ』初版以来の題詩。出版書名の応募作に添えられた藤谷多喜雄の挽歌。その訳詞一英語・中国語・ハングル・フランス語・エスペラント語とともに、当記念館のエントランスに掲げられている。

来館者の「感想ノート」より

毎年この時期になると、戦争について考えさせられます。半年前にこの開館を知り、やっと来ることができました。戦争で命を散らした多くの若者の生の声を聞いたような気がしました。現代に比し、いくら愛国心があると云えども、戦争に対する恐怖、絶望感等が垣間見られた手紙に、どこか安心感を覚えたのも事実です。ここに来て、よかったです。

(二八歳女性、07・8・8)

生き続けられたら、人間の幸せに大きな貢献をしたであろう若者たちの無念に心がしめつけられます。彼らのことを、世界を越えて語り、思いつづけ、戦争という人間がしてはならない行為を権力者に許さぬ決意を皆で持ちつづけていこうと思えます。(五五歳女性、主婦、さいたま市、07・8・27)

四〇数年前カッパブックスの『きけわだつみのこえ』を読み、ビックリしたのを覚えています。その頃は、戦争が悲惨なものであると観念的でした。でも今は二人の息子がもし戦争に行くことになったら…と思うと…。日本に限らず世界から戦いの火が全て消えることを祈ると共に、その手助けの必要を強く感じます。(六四歳女性、東京、07・10・17)

人間とは何だ、歴史とは何だ、それが歴史を動かすのだという問いが(柳田陽一さん)絶叫のように心に響きました。今も問いつづけられています。ことだと受けとめました。これからの平和をつくる取り組みに練りかえし、聞きたい言葉として覚えておきます。(六〇歳女性、07・10・19)

●

学徒出陣された若い人達の本音が聞こえて来ました。平和な今は、身の引きしまる思いで読ませていただきました。皆様大変、文字、文章が上手で、沢山の本を読み、真剣に勉強されたんですね。戦争は二度と繰り返してはならないと思います。親の想い、親への想い、深くかみしめました。(六七歳女性、文京区、07・10・24)

●

一度拝見したいと思っておりましたが、今日はその念願がかなって大変嬉しく思いました。私は終戦の年は一五歳、女学校の三年生でした。将来ある優秀な男子学生の方々が色々なおもいを胸に戦場へ突進して散ってゆかれました。改めてその御冥福をお祈りし、お礼を申し上げます。(七七歳女性、世田谷区、07・10・24)

●

昭和二〇年八月一五日は、海軍経理学校第三九期生(予科生徒)とし

て敗戦を迎えました(現在の高校一年生の年代です)。本年三月に来館して拝見しましたが、今回はあらためてゆっくりと遺稿を読ませていただき、如何に戦争が悪であるか、平和ボケした現在こそ、この記念館に出になっていただきたいものです。あれから六〇年余り、この方々と同じく戦死していても不思議ではありません。憲法改正の動きがある今こそ「わだつみのこえ記念館」に皆さんをお呼びしたいと思います。(七八歳男性、東久留米市、07・11・9)

●

学生たちが、日本の国民と一人の人間との意識のあいだで、いかに心を悩ませていたか、そして戦争は人間そして文明を破壊するものだ、と感じていたかよくわかりました。今の日本の状況で、戦争への道をすすんでいかぬよう、多くの人たちに訪れ、見て欲しいと思います。(四〇歳代男性、07・12・19)

●

高校生の時、友人のすすめで『きけわだつみのこえ』を読み感動、涙しました。三〇年たつて長男の東大受験のため、たまたま通りかかって記念館の看板を見て入ってみました。長男と同じ年頃の方々の戦死、私の生まれた沖繩嘉手納町で戦死した方、妻邦子ちゃんへという遺書に、大人になって(中年になって)さらに深く戦死された方々の無念が心に響きます。

本当にこの方々の死が無駄に終わることがないように、いつまでも平和をと祈ります。(五〇歳女性、読谷村、

08・2・25)

●

戦没学生の手記は、活字を見た時よりも実物の筆記の方が当時の気持ちやすごく感じられた。

臣民ではなく、一人の人間として綴った想いは、愛する妻、子供、家族、郷土に向けられ、何十年前の人達だけれども、それは決して今も変わらない想いだと思う。戦争を知らない私たちにとっていかに現実と当時を結びつけるかは、とても難しいと思っていたが、それは案外日常にあるのではないかと思う。(二一歳女子学生、三郷市、08・2・27)

●

今まで活字でしか目にしたことのない形目にする、遺稿を、このような形で目にする、また活字とは異なる戦没学生の想いが感じ取れた気がしました。

●

戦争という圧力の中にありながらも、自らの意志を貫き通すべく強く鍛えられた筆跡からは、活字では学び得ない、当時の学生の率直な心情を学びとることができました。自らの死と向き合いながらも、同時に国の将来を憂い、愛する者のことを想いつづけていたことは、どんなに戦況が変化しようとも変わっていないのだとも感じました。

今日感じたことを胸に刻み、これから「わだつみ」と向き合っていく際に活かしていきたいと思えます。平和な時代に生きる私たちが、彼らの残した声から学ぶことは多いと思います。(二二歳男子学生、坂戸市、08・2・27)

俳句吟行

上原良司碑を訪ねて

春蟬の午下をとどめず良司が声
丸山美沙夫
水無月の穂高に「自由」のモニュメント
上田 洋子
残雪をのぞむ良司の碑の温み
金倉より女
良司の碑かこむ句友や夏の風
米沢加奈子
春蟬に非戦を誓う良司の碑
山本 浩子
わだつみの遺書波立たす青山河
新島さく江
あずみ野にモニュメントの碑輝やきて
西村 萩華
わだつみの声地の塩に夏巡る
石谷はつ男
寝転んで良司と語る母子草
星 一子
夏山やわだつみの碑の女文字
佐藤 信
コスモスやきけわだつみの良司の碑
石山とみ子
良司の碑望む常念岳雪残る
今関 民雄

二〇〇八年六月一四日 新俳句人連盟吟行句会

自分は、人から受けている優しさやその人がいること自体をどう考えていたのだろうと、思いかえしてみると、すごく今の自分がさみしく思えました。

また、ただ見たままの感想になるのですが、使う字の違いとか、作文用紙は昔からあまり変わらないんだなということも、少し感動でした。

今まで、こういう題材に触れることは少なかつたので、本や資料館にしてまで、伝えたかったことは何なのか、掘り下げて考えてみたいと思いました。(二二歳男子学生、嵐山町、08・2・27)

当時の学生が何を想って、戦場に向かつていったのか、今を生きる一学生として真剣に向き合う必要がある。確かに「平和」尊いものだ。しかし、その言葉をそのまま誰かに伝

零墨

「戦争は恐ろしい。此れは僕が戦争に行くのがいやだといふのではない。僕は国に召されれば戦争に行きます。それは仕方がないことです。必要ならば僕は戦争に行く。此れはことばはおかなくちゃならない。僕はそんな人間ぢやない。然し、それとは違った

いみで、つまり僕が日本臣民であるといふ意味ではなく、一人の人間であるといふ意味に於て、僕は戦争を憎悪する。明らかに戦争は文明を破壊する。人は、或は、戦争は文明を建設するといふかも知れないが、そ

えるだけでは「平和」の芽は生まれぬ。本質的な意味は見出せない。

今(太平洋戦争後)という状況に、私が戦没学生と向き合うことの意味は平和の構成原理を個人でつくりあげる作業に他ならない。「平和」は尊い。だから、僕は過去の戦争に対して眼を開くし、責任を負おうと考える。その具体的手段が「わだつみ」を通して未来を考えることだ。

今日は戦没学生の記した手記等を直接見ることができ、本から伝わらなかつた戦争という不条理に対する痛切な思いが見てとれたように思う。(二三歳男子学生、08・2・27)

はじめて訪ねました。この様な記念館の存在は貴重です。より多くの方が来館して、あの戦争にて生き、又死した若人の方の声をきく様に願っています。ほんとうに良き志が実現

されたこと、素晴らしいことと思います。記念館の更なる充実と発展を心から祈ります。(08・4・21)

あの戦時の中で戦争のもたらすものに目をむけ、日本の国家がすすめた狂気をしっかりと見すえていた青年たちに深い感動を覚えました。貴重な資料です。多くの人に見てほしい。私も知人に知らせたい。本当にありがとうございます。(08・5・7)

当時の若者がどのような気持で死に向かつていったのか。肉親への手紙にあらわれている。反戦などという言葉、文字などは存在はしないが、手紙の文字の行間にある思いは「平和であつたらな」ということに尽きるのではないか。そのような意味で、当時の若者の直筆の文は見るも

命を死なせてしまふなんて一生涯たいて。空襲があつても何とかして此の身を生かしたい。僕には前途がひらけているのだ。必ず傑作を書きうるといふ自信があるのだ。その為には兎にも角にも生きなければならぬ。生きて生活をしなければならぬ。」と書いている。このように、戦争批判には、生き抜いて自らの創作を続けたい、それで自らをいかにしたいという思いがあつた。それが実際の戦争により潰されたわけである。原は一九四三年二月一日に、学徒出陣で陸軍に入り、経理部見習士官となつたが、翌年一月、東支那海で戦死している。(山辺昌彦)

の心を強く訴えかけてくるように、館の存在意義を感じる。

最後に展示(年表)への要望として、なぜ大空襲、沖縄戦、広島、長崎という、国民の、あるいは学徒たちの悲劇をつくりだしたのか、という根源的な点について、私は国体護持という一点の為に、戦争が長びかされ悲劇を増幅したと考えているか。その点にも触れた資料もあればと思います。(五八歳男性、宜野湾市、08・6・2)

彼らが心ならずも戦死した年齢の三倍も生きてきた私。私の子どもたちも彼らの年齢を大きく上廻っている。おろかな戦争によって失われた年代、今風にいえばロス・ジェネレーション。学業を絶たれた苦痛が行間からにじみでている。

彼らの死によって勝ちとつてきた戦後の平和はまたしても、あやしくなりつつある。昨今、繰りかえしてはならない暗黒の時代。その為に「わだつみのこえ」を風化させてはならない。(六三歳男性、横浜市、08・6・2)

残されたものが語りかけてくる重さはどう応えてゆくか考えつづけたと思います。「悲しい護国の鬼たちよ」と言う詩が憶い出されてきました。もう一度これを機に『きけわだつみのこえ』を読みなおしてみます。文による「無言館」として人にも勧め、多くの人が見に来てくれることを望んでいます。(六七歳男性、川崎市、08・6・2)

あらゆる戦争は、どの側に立つにせよ、すべての人にとって悲劇だと思います。ここに展示されている人たち、洋々たる未来にみちた生活を送っていた若者たちが武力紛争へ投入され、そこで死んだのは、悲しいことです。

一人の学生が次のように書いたことには深い内容が含まれています。「自分は一人の人間としては戦争を憎む。戦争のなかでは一つだつてよいものが花開くことはない。けれども、日本国民としての自分は、もし国が求めれば、喜んで戦争に行くだろう」と。

おそらくここに示されているのは、万国の多数の若者を、彼らの生命を奪う結果となつた武力紛争へと引きずり込んだ悲しむべき愛国心という側面なのです。(原文英語。大学生男性、英国、08・6・16)

若いころ、カッパブックス版『きけわだつみのこえ』を読みました。今日は、肉筆の資料の数々を拝見し感慨あらたなものがあつます。(男性、08・7・2)

いろいろな思いを抱いて戦争に参加し(参加させられ)死んでいった人達がいた。この記念館はコンパクトながらそういう人々と静かに向き合えるいい館だと思つました。東大が近くにありますが、学生の皆さんは見学に来ていらつしやるのでしょうか。(男性、沖縄、08・7・4)

第3回 わだつみフォーラム

バターン死の行進・強制労働の思い出
日米友情への願いをこめて

お話 レスター・テニー氏

(六月三日 於・わだつみのこえ記念館)

一九二〇年、シカゴ生まれのレスター・テニー氏は、米軍フィリピン

攻防戦に一九二二年四月九日、フィリピン・バターン半島の全米軍が投降した際に日本軍の捕虜となった。「バターン死の行進」のあと、大牟田の三井三池炭鉱で三年間強制労働を課せられた。このたびの来日目的は、全米捕虜組織であるADBC (American Defenders of Batuan and Corregidor) の最後の会長として「日米相互の理解を深め、赦し、和解、友情を築くため、過去十年にわたる英・蘭の元捕虜への対応と平等に、米捕虜と家族をも日本へ招待する基金の設立を望む」という願いを伝えるためであり、いくつかの大学における講演と学生たちとの対話、フィリピン戦元日本兵士、シベリア・モンゴルの抑留者グループの方々との交流・対話、江田参議院議長ら国会議員との面談という、五月二日から六月六日までの過密なスケジュールのなかの一日を、フォーラムのために割いていただき、五十名の聴衆を前に、その過酷な体験の一部を、質疑応答もまじえて約一時

問話していただいた。

講演に先だって、手塚理事長の案内で記念館展示室を見学したテニー夫妻は次のような感想を書いてくださった。

「この記念館は、私には非常に意義深い。実に多数の若者が死ななくてはならなかった―悲しいことだ。この記念館を訪問できてとても嬉しい。元捕虜 レスター・テニー」「記念館をお訪ねできて光栄です。この若い人たちの家族は、子どもを失いどんなに悲しかっただろうとよくわかります。ペティ・テニー」

米兵捕虜の体験記は左記のウェブサイトで読むことができる。このサイトは、カリフォルニア州にある非営利団体「USJAPAN DIALOGUE ON POWS, INC.」(捕虜 日米の対話) が運営しているが、当日の通訳を、この会の代表である徳留絹枝さん、東京代表の伊吹由歌子さんをお願いした。

http://www.us-japandialogueonpows.org

講演の記録は日本戦没学生生記念会機関誌『わだつみのこえ』一二九号(本年十一月刊行)に掲載します。

短 信

◆財団法人文京アカデミーが運営する「文京ミューズネット」に「わだつみのこえ記念館」の新規加入が認められました。これにより当館の所在地、開館日、イベント情報、文京区内の博物館・記念館・美術館・庭園などを紹介するリーフレット「ミュージズネットマップ」(十一月発行)に掲載されることになりました。文京区には個性的で魅力あふれる文化施設がたくさんあります

が、それらを巡るコミュニティバス「Bーぐる」も運行されています。また広報紙「文京スクエア」(八月五日号)と『区報ぶんきょう』(八月十日号)に当館を含めた新規加入四団体の紹介と、八月の各館スケジュールが掲載され、文京区ケーブルテレビでも放映されることになりました(八月四日〜十日と十八日〜二十四日。十二時十分〜十二時三十分と十九時十分から十九時三十分)。

十一月の「ミュージズウィーク」(一日から十六日)には当館も参加します。



形見の日章旗

す。

◆『第二集 きっかけ わだつみのこえ』に収録され、当館に遺稿展示のある奥村克郎氏形見の日章旗がアメリカより六六年ぶりに遺族のもとに返還されました。そのいきさつや遺族の思いを、日本戦没学生生記念会機関誌一七八号で紹介したのでお読みいただければ幸いです。『贈奥村克郎 大同製鋼はぐるま短歌会』と寄せ書きのある旗は、八月の江戸東京博物館で開催の遺稿展に出展します。

◆同じく『第二集』に載る宅嶋徳光氏の出身校・福岡高校(旧制福岡中学)では、二〇〇七年の創立九〇周年記念にCD『くちなしの花』を制作しました。宅嶋さんの後輩たちが、遺稿の感想を詩と短歌で表して、OBの音楽家が歌っています。そのCD二百枚が、ご遺族のお取りはからいで、福岡高校より当館に寄贈されました。ご希望の方には差し上げております。送料一六〇円(切手可)を添えてお申し込みください。願わくは時空を越えて語りたい白き心はくちなしの花

(高校六一回・中間政弘)

◆二〇〇六年十二月四日から〇七年七月末までの来館者数は一〇二六名。八月に江戸東京博物館で開催の「戦没学生遺稿展」には三日間で三〇〇名を超える方々、本郷の記念館にも九〇名の来館がありました。九月は四七名、十月二七名、十一月七六名、十二月三四名、〇八年一月四三名、二月三七名、三月二五名、

四月二五名、五月二四名、六月六六名、七月二四名、累計一五八九名。週三日、午後のみという限られた日時の開館ですからやむを得ませんが、少々さびしい数字です。知人の方々へ声をかけていただければありがたいと思います。

◆記念館を運営する「わだつみ記念館基金」の役員は次の方々です(二〇〇八年六月八日総会にて選出。任期二年)。

理事長 永野仁、副理事長 小島晋治、手塚久四、理事 石井力・井室美代子・高橋武智・中條雅夫、常務理事 岡安茂祐・渡辺總子、監事 別府栄典・古藤晃、わだつみのこえ記念館館長 山下肇。またスタッフとして学芸員の山辺昌彦氏、司書の二瓶治代氏、映像資料整理に馬場朋子氏、受付・応接・事務には井室・中條・渡辺各理事、ボランティアとして稲葉さん、小川さん、奥田さん、鈴木さんに加わっていただいています。

わだつみのこえ記念館
記念館だより

第2号

発行日 2008年8月1日

発行者 わだつみのこえ記念館

館長 山下 肇

東京都文京区本郷5-29-13

〒113-0033 赤門アビタシオン1階

電話/Fax 03-3815-8671

E-mail wadatsuminokoe@nifty.com

URL http://wadatsuminokoe.bookscool.com/

郵便振替 001800-3-612451